

里山モデル福島への道

福島県立ふたば未来学園中学校・2年 ^{ハヤシ} ^{カズイ} 林 佳瑞

土地が自然の力でよみがえった、本来の環境が復活した。人間が滅びれば環境は復活すると日々謳っている科学者たちが存在する。アスファルトで作られた道路に草木が生い茂り、イノシシなどの野生動物が朽ちた店内を自由に走り回る。そんな双葉郡の映像を見た一部の科学者が嬉々として声高に叫んでいるのだ。私はそんな科学者たちに言いたい。人間と他の生物との共生は不可能だというデマを流さないでほしいと。そして知ってほしい。人間とその他の生物の両方で成り立つ里山という環境があるということ。

震災前から福島県内の昆虫の調査をしている県農業総合センターの三田村氏によると、元々双葉郡は生物の宝庫だったそうだ。特に双葉町はタガメの多産地として全国的にも注目されていたが、2012年の調査でタガメが完全に消滅したことを氏は確認した。原因は放射線ではない。人間が稲作をやめ、水田に水が入らなくなったためだ。タガメ以外にも里山に依存していた生物の大半は、人間がその土地を離れざるを得なくなったとき共に姿を消した。里山は人間と生物で成立する環境だ。人間がいなくなれば、生物は生息が困難となり、その場を去ってしまうのだ。しかし、帰還困難区域が解除されたその土地で再び人間が農業を始めると、驚くことに消えた生物が戻ってくるケースが多いと氏は言う。この話を受け私は、どんなに荒廃した地でも元の環境を取り戻すことは不可能ではないという結論に至る。

2015年に達成期限を迎えたMDGsに代わり新たに国際社会共通の目標として2015年9月、SDGsが定められた。その目標15「陸の豊かさを守ろう」では陸上生態系の保護や生物多様性損失を阻止することが掲げられている。そのような中で里山による環境保全計画はアジアを中心に広まりを見せている。しかし残念なことに、まだ全世界で実行されるまでには至ってはいない。人間と他の生物との共生は不可能だというデマを流す人、

そのデマを信じる人がいるためだ。里山の可能性でこのデマを解消したい。人々の生物多様性への意識を高め、絶滅の危機に瀕した生物を救いたい。そこで福島、特に双葉郡を里山の可能性の継承地にしたいと考えている。原発事故の恐ろしさや風評で注目されていることを逆手に取り、世界中に里山環境の価値を発信する地として再出発をするのだ。

双葉郡では常磐自動車道や常磐線の全線開通、医療機関の再開など生活に必要なインフラは復旧しつつある。そのような中、私は学校の総合学習活動の中で双葉郡川内村の昆虫を日本全国に発信しようとしている。具体的には観察会や講演会などで興味を持ってもらい、定住人口や交流人口を増やそうと考えているのだ。生物多様性での地域おこし。原発事故福島から里山モデル福島へ。これが私の最初の一步。私のような生物好きな子供が悲しまない福島、世界を作るための最初の一步がいつか大きな道となることを信じて踏み出した最初の一步である。